

資金繰りの失敗は倒産に直結するよ心得よ



資金繰りの失敗は倒産に直結するということをよく理解し、日頃から資金繰りの計画をしておこう

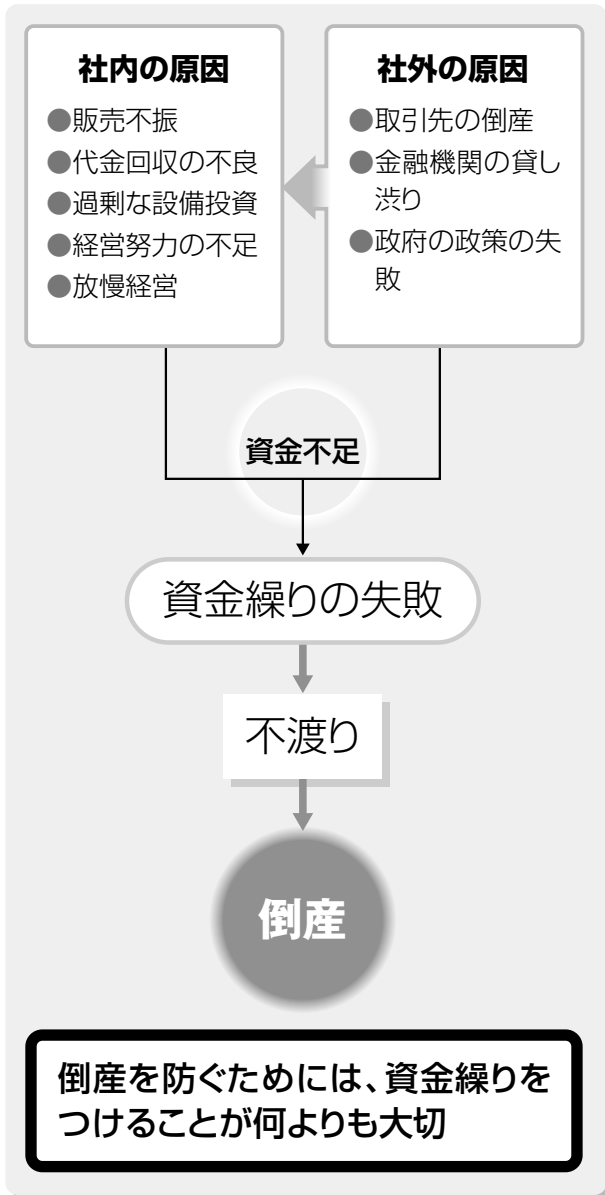
【倒産の直接の原因は資金ショートにある】

会社の倒産とは、いつのことを言うのでしょうか。会社が倒産したと、ハッキリ引導を渡されるのは、自社の振り出した支払手形の「不渡り」を出したときです。「不渡り」は、手形決済のための資金が調達できなかったために起こるものなので、**会社の倒産は資金の調達ができなかったこと、つまり資金繰りの失敗に直接の原因があるのです。**金融機関の貸し渋りが原因で、中小企業の倒産が急増しているというのも、うなずけることではありません。

もちろん、資金不足に至るまでにはさまざまな理由があります。金融機関の貸し渋り以外に、経営努力の不足、売上げの減少、保証人を引き受けるといった過失や放漫経営などが続いて、資金が不足し、手形の決済ができなくなって倒産というパターンです。

しかし、これらの理由があったとしても、当面の間の資金が調達できれば、その間に経営の体制を建て直していくこともできるのです。したがって、**倒産を防ぐためには、とりあえずは、資金の調達、**

● 倒産のパターンを理解しよう



つまり資金繰りをつけることが何よりも大切なのです。倒産は単に会社の終わりにすぎませんが、経営者や会社関係者にとっては悲劇の始まりです。債権者には連鎖倒産の危機が迫り、従業員は職を失うこととなります。そして最大の悲劇は、経営者とその家族に訪れるのです。

赤字でも資金繰りがつければ倒産しないと知れ



会社の生死は資金繰りで決まる。赤字でも資金繰りがつければ倒産を防げることを理解しよう

【資金繰りに失敗すると黒字会社でも倒産する】

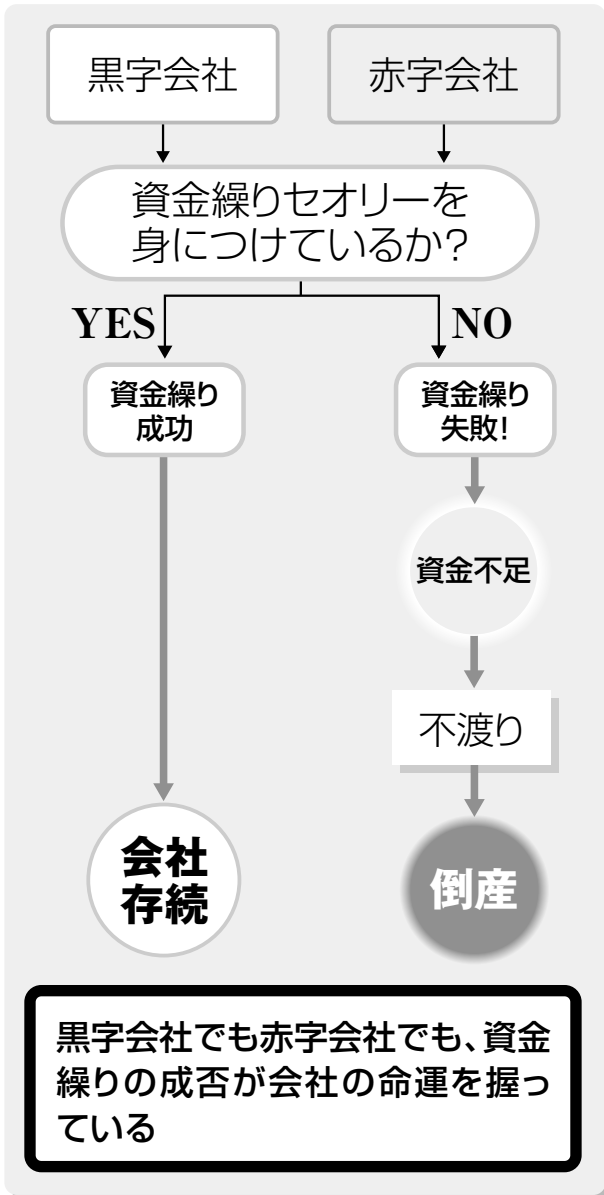
黒字倒産という言葉聞いたことがあるかと思いますが、倒産というと、赤字会社をイメージしますが、黒字であっても資金繰りがつかなくなると倒産するのです。資金繰りに失敗すると、たとえ黒字会社でも倒産してしまうことをよく理解してください。

逆に赤字会社でも資金繰りがつければ倒産を防げます。どんなに赤字でも、銀行などから資金調達できれば、不渡りを出すことはなく、倒産を免れることができます。現に、有名な大企業の中には、赤字を出し続けているながら倒産せずにいる建設会社やスーパーなどがあります。これらの大企業には、銀行が融資をし続けている、つまり資金繰りがついているので倒産しないのです。

また、中小企業の中にも、10年以上も赤字を出し続けているのに、倒産しない会社があります。社長が資産家で、社長の不動産収入や不動産の売却代金などの資金を会社につき込んでいる場合です。

このように、たとえ赤字続きの会社であっても、資金繰りさえつければ倒産しないのです。

● 資金繰りの成否が会社の運命を決める



もっとも、一般の中小企業は、「大きすぎてつぶせない」大企業のように銀行が融資をしてくれるわけではありませんし、社長が特別の資産家というわけではありません。そこで一般の中小企業は、日頃から財務体質を強くし、第2章以降で説明する資金繰り改善のセオリーを身につけて倒産を防ぐようにするしかありません。

資金繰りの意味を理解せよ



資金繰りとは資金の入りと出のバランスを図る手続き。不足する資金は調達し、資金が余った場合は運用する

【会社の資金には過不足が起るもの】

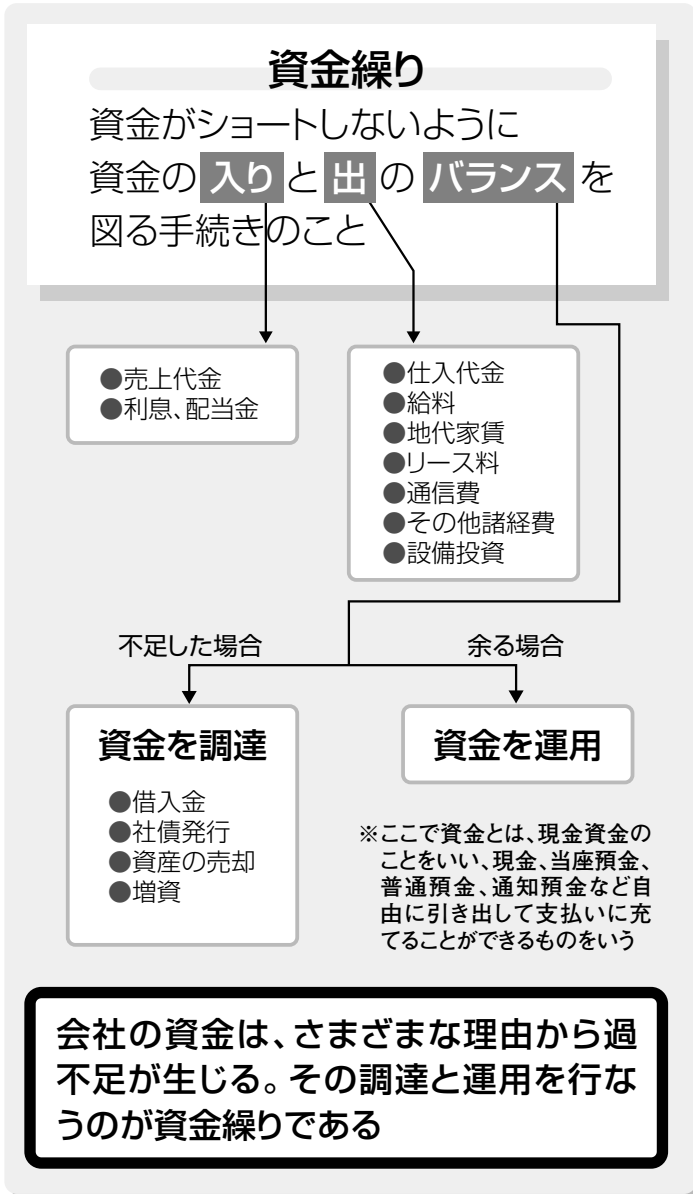
会社には定期的に支払わなければならない出費があります。例えば、毎月支払う仕入代金、給料手当、家賃、水道光熱費、リース料、通信費などの諸経費です。その他、年に数回支払う賞与、税金などもあり、これらは決められた額を決められた日までにキチンと支払う必要があります。

それらの支払資金は、通常、売上代金より賄われますが、売上げは景気の動向とか、季節的要因、経営努力の如何などによって変動します。また得意先の都合により、すぐに代金を支払ってもらえないと限りません。そのため資金が不足することもありますし、ときには余ることもあります。

支払いの前に入金があればよいのですが、得意先の事情により支払日の後に入金されることもあり、この場合には資金が不足します。また、設備投資をするときにも資金は不足します。

このように、通常は会社の資金はいつも一定額を保てるわけではなく、さまざまな理由から過不足が生じます。資金が不足すると支払いができなくなりますから、**資金がショートしないように、資金**

● 資金繰りとは何なのか？



の入りと出のバランスを図る手続きが必要なのです。もし、資金がどうしても不足するようだったら資金を調達し、資金が余ったら運用します。これが資金繰りです。

利益と資金の違いを知っておこう



利益と資金は一致しない。利益は企業会計のルールにしたがって計算した数字で、実際の資金収支とは異なる

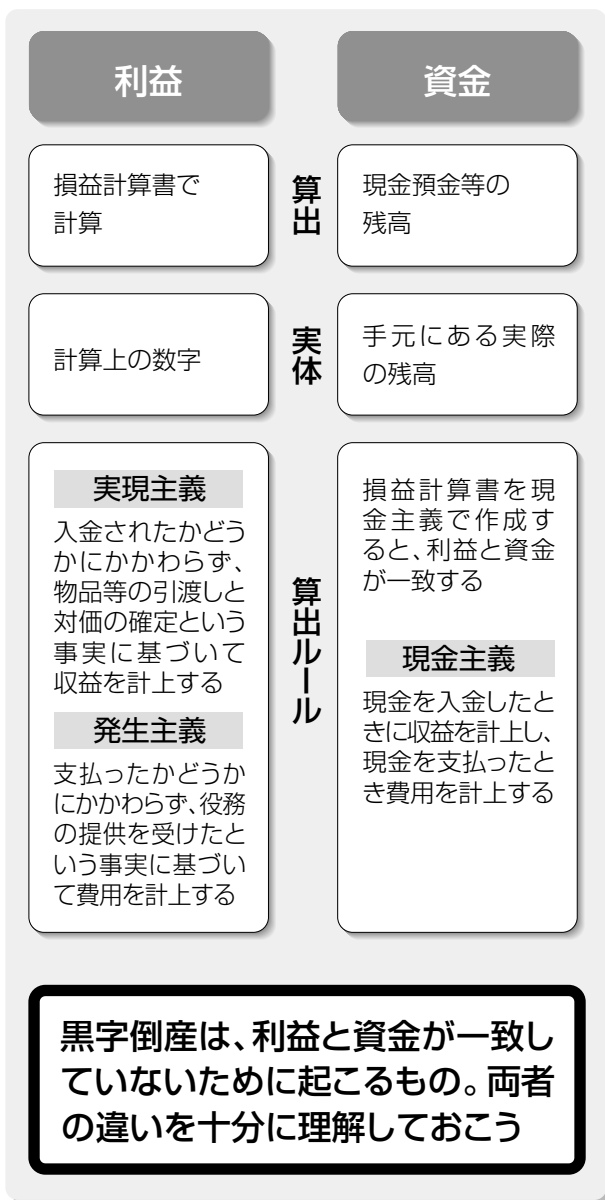
【なぜ儲かっているのに資金がないのか？】

中小企業の経営者であれば、利益が出たので税金を払わなければならないが、その資金が手元にな
いということを経験した人も少なくないはずだ。利益が出ているのにお金がない、いわゆる「勘定
あつて銭足らず」という状態です。これは利益と資金が一致していないことから起こります。資金繰
りを円滑に進めるために、両者の違いをよく理解しておいてください。

会社の利益は損益計算書で計算されます。損益計算書では、売上高から売上原価や販売費及び一般
管理費を差し引いて利益を計算します。

ここで売上高というのは、一事業年度にどれだけ売ったかを示すもので、売上代金を回収している
かどうかを問いません。したがって、売上高、売上原価、販売費及び一般管理費などがまったく同じ
でも、売上代金を全額回収している場合には十分な資金が手元に残っていますし、逆に、売上代金の
未回収額が多ければ、手元の資金は乏しくなってきます。

● 利益と資金は何が違うのか？



その他、在庫の多寡、仕入債務の残高、投資をしたかどうか、減価償却費の額などによって利益と資金が違ってきます。それは損益計算書の利益が「現金主義」ではなく、「実現主義」と「発生主義」（左図参照）によって計算されているために生じます。利益を出しながら倒産してしまう「黒字倒産」も、利益と資金が一致していないために起こる現象なのです。

なぜ資金繰りが必要なのか再確認せよ



資金繰りがうまくいけば会社は大きく成長することもできる。資金繰りは経営者の最も大切な仕事のひとつである

【資金繰りの目的は倒産を防いで会社を成長させること】

なぜ資金繰りが必要なのか？ その理由のひとつは、先に説明したように利益の額が資金の残高と一致しないためです。したがって、会社は資金繰りの状況を把握しなければなりません。

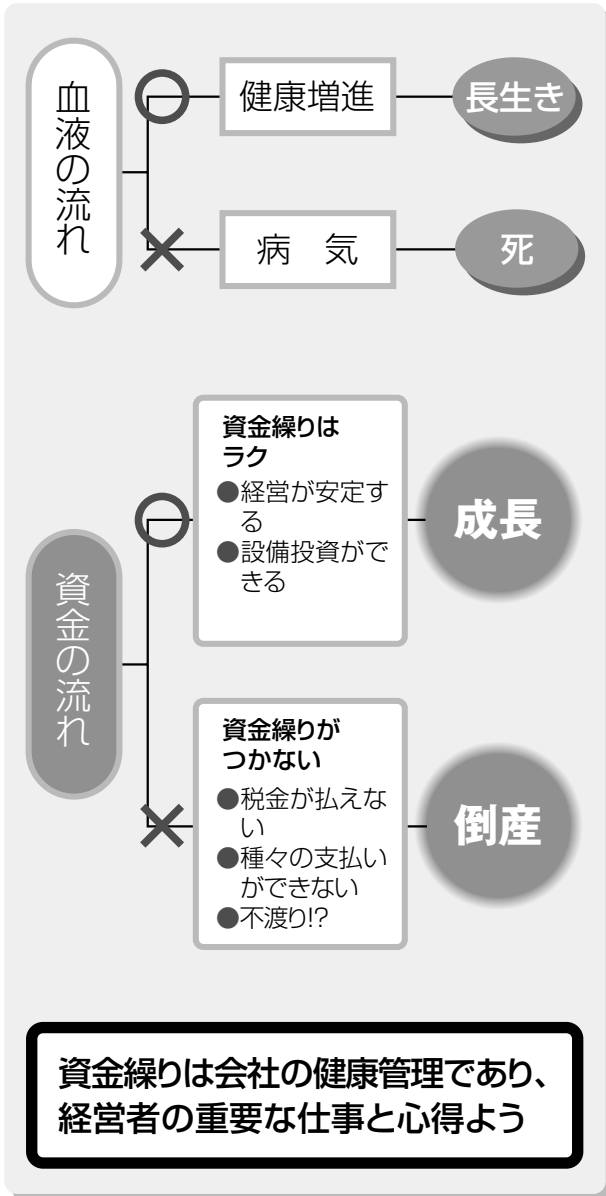
もうひとつの理由、これが根本的な理由ですが、それは、資金繰りを行うことによって資金ショートを防ぎ、関係者に迷惑をかけたり、不渡りを出さないようにするためです。

資金繰りがつかないと、まず、法人税や消費税などの税金が払えなくなります。税金を期限までに支払わないと加算税や延滞税などのペナルティーを課せられ、ますます資金繰りが苦しくなります。次に、仕入れや経費の代金が支払えなくなり、さらに給料が支払えなくなっていきます。種々の支払いが滞ると、会社の内外の関係者に迷惑がかかり、会社の信用も低下していきます。

そして、最後には不渡りを出して倒産に追い込まれます。

資金繰りがうまくいけば、経営は安定し、設備投資を行なって大きく成長することも可能です。し

● 資金の流れは血液の流れと同じ



たがって、資金繰りは経営者の最も大切な仕事のひとつであることを再確認してください。

会社の資金の流れは、人間の血液の流れにたとえられます。血液の流れが滞ると病気になる、最後は死に至ります。それと同じように、会社の資金の流れが滞るとさまざまな問題が発生し、最後には倒産に至ります。資金繰りは倒産を防ぐ会社の健康管理であり、また健康増進策でもあるのです。